
こころのある場所

夕叢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここにいるある場所

【NZコード】

N7622F

【作者名】

夕叢

【あらすじ】

起きた事は無かつた事には出来ない。でもやり直す事は出来るかもしれない。だから…大切な人の為に、私は重大な選択をした。そして今私は、その大切な人と、もう一人の少女と三人で中学校の帰り道を歩んでいた

(前書き)

拙いですが読んで頂ければ幸いです

心、それは在つて有るもの
軀、それは心の入れ物
魂、それは両者を結び付ける楔
では心とは何か。脳内での化学反応によつて左右される定められた
感情？
それとも、生物に備わる目に見えない、精神：若しくは力とでも呼
ぶもの？

「哲学ねえー。ま、どうでもいいけど」

そういうつて赤い髪をした彼女は欠伸をし、この話題は終了する
元々は彼女が持ち出した話題なのだけど、飽きっぽい性格だから気
にしない

まるで猫みたいだ、と思つてくすり、と笑うと彼女は怒り出した
ほつぺたを抓られ、何を考えてたのかを白状させられる
私は、アスカが猫みたい、と言つたら彼女は怒り出して、私は誇り
高く、孤高に生きる獅子そのものよ！と言つた
また私が笑うと彼女は更にほつぺたを抓つてくる
痛い痛いと私が言うと、満足したのか放してくれた
そして、彼女はカレイバつていう鳥を知つていてる？と聞いた
私が首を横に振ると彼女は得意げに、あんたみたいな空髪の色をし
た鳥よ、と言つた

そんな鳥もいるのか、と感動していたら、少し離れた所にいた少年
がアスカに、あまりからかうのは止めた方がいいよ、といった
どういう意味と二人に問うと、少年が苦笑して首を横にふり、アス
カは悪戯が成功した子供みたいににやけていた
混乱している私に少年が、カレイバつて十回言えばわかるよ、とい

つた

やっぱり少年は苦笑していた

カレイバカレイバカレイ…馬鹿レイ…

十回も舌の上でその単語を転がさなくてわかつた

アスカ！と私が叫ぶと、アスカは笑顔のまま逃げてしまつた

私と少年だけがその場に取り残され、少年が、僕たちも帰ろうか、と呟いた

少年は苦笑を微笑に変えていた

逆に私は苦笑していた

アスカのあからさまな気遣いに

私たちは一人で帰つた

少年の名前は碇シンジ

出会つたのはあの日、初号機の前。彼を意識し始めたのは月光が私と彼とを照らしていたあの時

でも私は死んだ。いえ、消えた

そして三人目の私。白紙となつたはずのこころを抱えて、彼の望みを叶えた

でも彼はある赤い海で後悔していた

アスカの首に手をかけて、ゆっくりと力を込めて…

全てを失つた彼は世界に絶望していた

だから、彼が望む世界を私は造つた

この記憶と世界を消した罪を手に

それは、もはや私以外は知らない世界、別の可能性、過去にあつた未来、消去されたモノ

彼が望んだ今ある世界は、使徒もNERVも無い世界死闘も、絶望も、そこにはない

ただ日常と平和があつた

私は彼とは中学一年で知り合い、一年となつた今でも友人として付き合つている

渚カラルも、鈴原トウジも、相田ケンスケも、惣流・アスカ・ラングレーも、洞木ヒカリも、みんな、友達として…

だけどそこに私が知る皆はいなかつた

ただ、前の世界の影を今に重ねているだけ

でも、碇君は碇君だつたし、みんなはみんなだつた。嬉しかつた
例え影を追い掛けているとしても私の心はそれを肯定する、できる
それは幸せなんだと思う。いいえ、それは幸せ
でも肯定出来るのはずっと碇君がいたから。彼無しに今の私は有り
得ない

だから今も昔も彼に惹かれている。彼が初めて私に涙を見せた、消
されてしまった遠い過去からずつと…

考え込んでいたらそのまま眠つてしまつた

時計の短針は六を指している

外は漸く明るくなり始めた所だ

少し早起きだつたみたい

「綾波、起きた？」

どうやら思い人は案外近かつたらしい。布団をかけ直そうとしてく
れていた。でも見よつによつては覆いかぶさうとしてるよつにも
見えるだろう

そう思うと緩む頬を抑えられず、寝た体勢のまま笑顔で頷く
彼は慌ててそつぽを向くと、料理作るから、と行つて台所に引っ込
んでしまう。残念

現在、碇君と私とアスカは三人で共同生活をしていた
理由は、私が一人暮らしなのを司令…いえゲンドウおじ様が見咎め
て、誘つてくれたのだ

でもコイおば様もゲンドウおじ様も海外出張が忙しく、ほぼ碇君との二人暮らし

それに危機を感じたのか、はたまた不確定要素を追加したかったのか、コイおば様がアスカも家に招き入れ、済し崩しに三人での生活を送る事になった

だから…毎日彼の手料理を味わい、三人で一緒に登下校をし、家ではテレビを見たり、他愛もない会話をする

まるで家族だ、と思うと嬉しくて、可笑しくて堪らない

それに、彼といふ時間は新婚生活との気分

これでも共同生活の時間は結構経っているのだけど、未だに慣れないう所を見ると、恋は魔法というのも存外本当かも知れない
未だにかかる魔法を胸に、台所にいる魔法使いをじっと眺める
こちらに気付いてないのか熱心にとんとん、とリズミカルに野菜を切つていく

それを耳に心地よく感じながら居ると、ビーツやらむつ一人の同居人が目を覚ましたみたいだ

「あらあら、随分熱心に見てるのね。朝からお暑くて結構です」と

様子を見るに今起きた訳ではないらしい

アスカは起床30分は死んだ魚みたいな目と荒れた髪を共にしてリビングにだらし無く伏せてるから
目で、どうしたの?と尋ねると、朝からこちやこちやされてたら私がだつて起きるわよ、とのこと
それもあるけどそれが全部でもないだろ
アスカがこんな早い時間に起きるなんてよっぽどだから
例え…そう、誰かと会うとか

その結論が出て来ると同時に呼び鈴が鳴る
アスカが待つてましたとばかりに玄関に出ていくのを見ると予想は正しかつたんだろう

「ママ！久しぶり！」

「久しぶり、アスカちゃん。元気にしてた？」

玄関からアスカとキョウウコさんの声がする

碇君は顔を一瞬上げたけど、また料理に戻った所を見ると知つて、たんだろ？

のけ者にされちゃうと悲しい

後で碇君に甘えよう、と割といつも通りな決意をしてキョウウコさんに挨拶に行く

キョウウコさんは、あらあらあらあら大きくなつて、などと言ひながらワシワシと頭を撫でてくる

キョウウコさんはアスカに似てパワフルだ。ちらりとアスカを見て親子だな、と納得してたらキョウウコさんより酷くアスカに撫でられた。目線が気に入らなかつたらしい

漸く解放してもらつたら髪を見た碇君が目を丸くして、台風にでも会つたの？と聞いてきた

家まで入つてきた親子を見ると納得し、あ、焦げそつ、なんていつて鍋の火加減を見に行つてしまつた

私は慰めて貰えず、傷心のままに髪をセッットしに部屋に戻る

どうやらキョウウコさんはまた仕事があるとのこと

忙しい中、帰つて来たはある物を渡す為だとか

受け取つた碇君は謝辞を述べていたけど内容は分からぬみたいだ

キョウウコさんは碇君の料理を食べ終わると満足して帰つていつた

食卓には三人と一枚の封筒。アスカは碇君に開けるよう促し、期待の眼差しで封筒を見つめる

やがて出て来たのは四枚の紙

アスカが、何それ？と碇君に聞く

「遊園地のチケット？」

らしい

そういえば最近近くに遊園地が出来たとアスカと話した記憶がある
どうやらそのチケットみたい

しかも、ふれみあむチケットとのこと

よくわからぬけれどかなり入手困難で、遊園地の待遇がよくなる
チケットとはアスカの談

幸い、今日が休日なので三人で行こうとしたのだけど、一枚余る
そこで…

「で、なんでよりによつてアンタなわけ
「おや、照れ隠しかい？好意にぎやうつ！？」

そこで、渚力ヲル、彼にお呼びがかつた

渚君は碇君の親友。だから私も文句はない…けれどアスカは彼の事
が嫌いみたい

いいえ、多分嫌いではないのだけど…それどころか、もしかしたら
本当に照れ隠しかもしれないわ

でも照れ隠しも程々にしないと、好意を受け止めて貰えないわ

照れ隠しに関節技を極めるのはやり過ぎだと思うの…渚君の関節か
ら今まで聞いた事の無い異音が聞こえてくるけど平気かしら？
泡を吹き始めて痙攣しつつあつた渚君を見て、碇君が慌てて仲裁に
入る

しばらくして復活した渚君は、これも愛の形さ、といつていたから

平気みたい

あれも愛の形なのかしら？碇君の腕を見ていたら何故か、あれは違うよ！と黙つて慌てて腕を隠す

そう、彼らだけの愛情表現なのね。すこし妬けるわ

3時間待ちの長蛇の列を尻目に店員にチケットを見せるとすぐに遊園地内に入れた

「さてと、どう回らつか？」アスカが楽しそうにパンフレットを広げる

私達はそれを覗き込む。けど何がどうなのか私にはわからない三人は楽しそうに見るので仲間外れの気分だ

それを察してくれたのか碇君が、綾波はどれがいい？と聞いてくれるわからない、というと碇君はここからでも見える施設を指で示して、パンフレットの内容と一致させようとしてくれた。碇君、いつもより優しい…

再び、どれがいい？と聞いてくる

私は、あれ、と一点を指差した。でも何故か顔が引き攣る碇君ダメ？と首を傾げて聞いてみたら、ちょっと苦手だけど付き合つよ、と言つてくれた。

苦手なのに付き合つてくれる。それはとても嬉しいことありがとう、と笑顔で言つと碇君は、今日は久しぶりに遊びに來たんだから、と恥ずかしそうに笑つていた
アスカと渚君もそれでいいと了承し、数分後

フリーフォールで垂直落下した

「碇君、大丈夫？」

返事をする気力もないのか碇君はふらふらしながら頷く
逆にアスカは楽しかった、とご満悦
渚君はいつも通りのニコニコ顔。でも足が生まれたての小鹿のよう
アスカは、今度はあれに乗りましょう、と「じえっとこーすたー」
を指差している

私は首を振つて、碇君を看病してるから一人で行つてきて、といった
渚君がアスカに連れて行かされる時、彼の目を見たらドナドナが歌
いたくなつた。『愁傷様。

私は碇君をベンチに座らせると、自身もその隣に座る

碇君はまだ顔色が悪い

何か欲しい？と聞くと首を横に振つたので私達はベンチで静かにしていた

碇君はやがて私に、楽しかった？と聞いてくれた

私は微笑んで頷くと、碇君は、三人で遊びに行くのは滅多にないから、今日は楽しもうね、と言つてくれた
だから今日はこんなに優しかったのか、と私は納得して碇君に満面の笑みで返事をした。ありがとう、と

碇君は一瞬止まつた後でそっぽを向いた。顔がすごく朱いのを見る
ともう平気みたい

「終わったわよー！これ、お土産」

どうやらアスカ達も楽しんで来たみたいだ

…お土産つていうのは、アスカが引きずつている渚君かしら？
よくみると顔が土氣色になつていて。怖かったのね

アスカは氣色満面といった様子で、もう片方の手からジュースを出した

どうやら渚君ではないらしい。安堵して一本受け取ると、一本を碇君に渡す

アスカは、一つ合わせて400円ね、と言った

お土産なのにタダじゃないの？！と碇君が突っ込んでいたけど、アスカがタダでくれる方が恐ろしいと思つ。色々と

丁度、アスカ達が帰つて来た頃がお昼だったので、近くで食事を済ませる

渚君は食事前には復活していて、アスカさんといふと大抵の事は慣れるものさ、と言つていた

でもアスカが関節技を極めたり、肋骨の隙間から肺を強打したり、綺麗に半円を描く踵落としをしたり、ジャイアントスイングをするのは渚君だけよ、多分

食事が終わつた私達は、絶叫系と呼ばれる乗り物以外を回つて時間を潰した

大体のアトラクションを堪能すると、時刻は夕刻になつていた

「あと、残つてる乗り物は…お化け屋敷と観覧車くらいかな

パンフレットを覗き込みながら碇君が言つ

閉園が8時だから多分両方乗れるだろう、と言つて最初はお化け屋敷に行くことにした

アスカは何故かお化け屋敷と聞いた瞬間、黙り込んでいる
…もしかしてアスカ、苦手？

長年の付き合いによる田だけの問い合わせをする

アスカは不機嫌そうに私の方を睨む

そーよ。悪い？

で合つてゐると思つ

そういえば、夜遅くにアスカと心霊番組を見ていたら、アスカが私の布団に潜り込んで来た記憶がある

お化け屋敷に着くと、二人一組で入って下さい、と係員の指示があつた。矜持の高いアスカは碇君や渚君とは嫌でしょうね…仕方ないわ

「碇君。私、アスカと行く」

わかつた、と碇君は言つてくれたけど残念そうに見えたのは、私の願望だつたろうか

先に碇君と渚君が行き、私達は少し待つ事になる良かつたの？ 抱き着くチャンスだつたのに、とアスカがぼやいてたけど、嫌そうではない所を見るこれで良かつたと思ういいの、と私が言うとアスカが、400円チャラにしたげる、と目を逸らして呟いていた

素直にありがとうと言えないのが彼女らしい。私は少しにやけてしまつたけれど、こっちを見てないお陰で気付かれなかつたようだ時間になり、私達も中に入る

アスカは見るからに怯えていて、私の腕にギュッと掴まつていた仕掛けに一々驚いては、私に抱き着くのがあまりにかわいくて、頭を撫でたら怒られた。かわいかつたのに

出口まで辿り着くと、アスカは手近なベンチに腰掛け、脱力していたアスカがそんな姿を見せるのは珍しくて、私がクスクス笑つていたらグーで頭を殴られた。痛い

アスカの隣に座り、頭を抱えながら碇君と渚君を探していたら、何故か私達より後から出て来る

渚君が、コースが何個か別れていて、僕達は長いコースに行つたみたいだ、と説明してくれた

碇君、怖かった？と私が聞くと渚君が、シンジ君は僕に抱き着いたり、少し涙目になつたりしていて、とってもかわいかつたよ、と言つた。羨ましい…

碇君は慌てて渚君の口を塞いでいた。どうやら恥ずかしいみたい
そんな碇君に、復活したアスカが、あんなのに怖がるなんてお子ち
やまねえー、なんて言つもんだから私は笑うのを堪えるのに必死だ
つた

アスカが、じゃ、観覧車行きましょ、と言つて最後のアトラクショ
ンの方へ向かつ

観覧車は四人乗りだつた

けれど、お化け屋敷のショックから立ち直れてなかつたのか、碇君
が観覧車の前でふらつき、倒れてしまつ

中には既にアスカと渚君が乗つていて、私達の見てる前で扉はしま
り、一組に別れての行動になつてしまつた

一個後ろの観覧車に乗つた。碇君は、「ごめんね、と言つていたけど、
碇君と二人切りでも嬉しい、と言つと、碇君は外を向いて黙つてしまつた

碇君、夕焼けのせいか、あるいは…頬が朱い

私達がいる所が頂点になると、碇君が、今日は楽しかつたね、と言
つた。本当に、とても晴れ晴れした表情だつた

私はそれを見ると、居ても立つてもいられなくなり、座つていた場
所を離れて、碇君の隣に座る

そのまま、碇君に抱き着いて、ありがとう、と耳元に囁いた
碇君を腕の中に感じながら、私は幸せを噛み締めていた

「はー今日は楽しんだわねー」

「ふふ、そうだね。今日はここに誘つてくれてありがとう」

バカシンジがこけた時はどうなるかと思つたけど、どうにもならなかつた

結局、バカラルと一緒にこの揺り籠の中でだべつている

「ま、誘つたのはシンジだし、お礼ならあいつに言ひなさいよね」

「うん、そうしよう。この後はどうするんだい？」

「そーねー、ヒカリとかにお土産でも買って帰りうつと思つてゐるけど、アンタは？」

「碇君に晩御飯のお誘いを受けてるけど、聞いてなかつたのかい？」

「全く。ま、歓迎してあげるわ」

「ありがとう、アスカさん」

疲れたので体を完全に椅子に預けて、一個後ろの観覧車を見る

「レイも大胆ねえ」

丁度、シンジの隣に座つて抱き着いている所だつた

あの朴念仁にも少しばらぐ心つてのがわかつたかしら？

バカラルも私の独り言が聞こえたのか、楽しそうに後ろを見ている

「青春だねえ。アスカさんも好きな人はいるのかい？」

「さあね。アンタは？」

「んー、気になつてゐる子はいるかな」

少し意外だ。てっきりまかすかと思つてたのに

それにしても…

「…女、よね？」

バカラルは答へずにニヤニヤしながらこちらを見ている

そろそろ降りなければならないので問い合わせる機会も失う
シンジじゃなければいいけど…

勝ち気な美少女さ

彼が呟いた言葉は考え事をしていた私には届かなかった

「ホンっとに幸せそうに寝てるわね」

アスカの言葉に僕は苦笑を返すしかない

綾波はあの後、安らかに寝息を立てて僕に体重を預けて来た
多分、疲れてしまつたんだろう。僕は仕方なく綾波をおんぶする事
になつた

渚君も家に誘い、アスカに付き合つてお土産を買い終えると、閉園
時間になつた

綾波は起きないので、そのまま僕がおんぶしつぱなしである
家に着くと漸く起きて、『めんなさい』と言つていた。アスカは
「それは何に対する『めんなさい』かな~?」

と言つてからかつていた

途中から起きてた事は僕だつてわかっているのに… やれやれ
僕は今日最後の仕事、料理を片付けに台所へ向かう

… 本当は、遊園地を出た辺りで起きたのだけど、碇君の優しさに甘えて家までおんぶしてもらつた
演技が下手だからきっと皆にばれているだろっけど、誰も何も言わなかつた

家に着いたらアスカにからかわれたけれども
碇君がご飯の支度を始めたので、私も手伝う
碇君を手伝う内に料理を色々覚えたので、紅茶を沸かそうとして火
傷した頃と比べれば随分進歩したものだと思う
食事の時間は、いつもより賑やかだつた

皆で遊園地での話をしながら、お土産の見せっこなど、昔は有り得なかつた光景が私の目の前に広がつており、その中に私がいる
皆が笑つてゐる。それだけで幸せ

碇君が、私に話し掛けてくれる。それだけで満足

渚君はやがて帰り、私達も寝る事になつた
しかし私は少し寝てしまつたので目が冴えている
だから少し考えてみる

私は一度世界を消した

それは幾億の人々の全てを否定したといつこと

それは喜び、悲しみ、怒り、楽しみ、不安、安らぎ、憎しみ、愛情、
好意、嫌悪、苦痛、快樂、願い。様々なこころを否定し、消した
「いつ」と

でも、私はこの世界が好き

だから、後悔はしていない

これで、良かったのか？…私のこころが肯定できる
この罪と共に生きていこう

私は忘れない。私の我が儘で幾億の人々を否定したことを
でも私は弱いから、一人ではこの重圧に耐えられないかもしれない
だから、碇君。ずっと、一緒に…

また寝付いたみたい

時計は5時を指していた

：寒い

ずっと夏だった時代を過ごした私は寒いのが苦手
だから、布団を自らに巻きながら碇君の部屋までいく
碇君はまだ寝ていた

自分の布団を碇君の布団の上に被せ、碇君の布団に潜り込む
布団一枚 + 碇君の体温がとても温かい
私は甘えるように碇君に抱き着いた
碇君。ずっと一緒に、いてね…
私は甘い眠りに落ちて行つた

(後書き)

タイトルは聖剣伝説レジェンドオブマナの曲名から、遊園地の一部の表現を上月司氏著の、れでい×ばとーから引用しました。どうでもいいですね。読んでいただいた方に感謝を。ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622f/>

こころのある場所

2010年10月14日15時47分発行